

# 隨泉寺寺報

平成28年（2016年） 10月号 第554号

Tel.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

## 秋季永代経法要

講師 浄念寺住職 安達高明師

講題 『雑行を捨てて本願に帰す』

☆ 永代経とは、故人の命日ごとに永代に経を読むことを言います。

ただ読むというわけではありません。お経を読むことで仏縁を繋ぐのです。いままであまり仏教に縁の無かった人が、故人を縁として、仏法に触れる機会にも成り得るのです。そしてその、法を聞く宗教空間としてお寺があります。故人を縁として、自分だけではなく、後の世代も仏縁に出遇うことを願うこと。そして、お寺の維持存続を通し、永代に経が読まれ法が伝わるという願いを持ち、ある程度の懇志（お金）や仏具をお寺に納めるのが「永代経懇志」です。

### 10月の法座予定

- 10月 2日……………本部役員会
- 10月 9日午前……………掃除 出宮
- 10月 15日朝席午前10時より……………門信徒の集い お齋
- 10月 15日昼席午後1時より……………秋季永代経法要
- 10月 15日昼席終了後より……………旅行説明会
- 11月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話— 10月

「かけがえのない自分の人生をそのまま受け取れない自分がいる」

（二階堂 行邦）

菊の花が美しい季節となりました。夏以来の台風・水害地震の被災地では、どのような日を送っていらっしゃるのでしょうか。お見舞い申し上げます。

天災地変に理由を探しても、納得できるものが見つかるとは思えませんが、悔やむ心をどうしようもない方々が多くいらっしゃると思います。知識としては理解しても、自分の人生としては受け容れられないところに人間のいのちの深く



重い課題が感じられます。崇りや神仏のせいにして解決するのではなく、受け容れられないことは、受け容れられないままに、生き抜く道を見つけだしたいものです。答えの出ない問いをこそ、仏法に聞くのだと言う方があります。私よりもう一つ大きなもの、私を包む広いところ、その中に、私の総てが受け容れられている

ことに気付く時、辛い中にも、自分のいのちに自信をもって生きる道が開かれます。阿弥陀如来さまに受け容れられているから、私自身を受け容れ、他の人々を受け容れる心が育つのです。

お念仏申しつつ、日々の出来事を縁として、広い心を養いたいと思います。☆

### 伝灯奉告法要 隨泉寺参拝日 10月25日～26日

宗祖・親鸞聖人があきらかにされた「浄土真宗のみ教え」（法灯）が、聖人から数えて第25代となる専如ご門主に伝えられたことを、仏祖の御前に告げられるとともに、お念仏のみ教えが広く伝わることを願い、伝灯奉告法要が平成28年秋から29年春にかけて1日1座、80日間勤められます。

※1 法灯：「念仏の法」と示される、親鸞聖人がひらかれた本願名号の真実の教え、浄土真宗のみ教えのこと。

※2 伝灯：宗祖・親鸞聖人が明らかにされた真実の教え「浄土真宗のみ教え」（法灯）を伝承し、受け継ぐこと。

## 仏さまに願われ 生かされている私

子どもや若者の自殺が続いています。過日の新聞は、その日、日本各地で六人の中学生・高校生が自殺したことを報道しました。

九条武子夫人のお歌が思い出されます。

見ずや君 あすは散りなん花だにも

力のかぎり ひとときを 咲く

草も木も、虫も魚も、みんな、力いっぱい生きています。

T君も、ある精薄の施設で、短い生涯を、見事に生きぬきました。彼は、精薄・高血圧・左半身不随・てんかん・心臓の構造異常による度々の激痛の中を生きぬいたのです。死後発見された彼のノートには、  
「母がたずねてきた。やせてしもて、ほそい体になっていた。苦勞したんやな、ぼくのために。母ちゃん、許してや。ぼくがバカやってんな。許してや、母ちゃん」と、書き遺されていたといひます。「ぼくのために」やせてしまったお母さんを憶うと、どんな病苦にも、激痛にも耐えて生きずにはおれなかったのです。



「五劫思惟」のご苦勞と「願ひ」の中を生きさせていただく私たちです。粗末に生きては、申しわけありません。このことを忘れ、「生きる」ということを粗末にしている私たちが、子どもや若者たちを、簡単に、自殺に追いやっているのではないのでしょうか。

※「五劫思惟」とは、阿弥陀さまが私たちを救うために、想像を絶する時間をかけて考えぬかれたことをさします。

台風が来たり、大雨が降ったり、地震が起こったり、自然の災害は避けようがありません。また老人病院での不可解な無差別殺人も意味が分かりません。混沌の時代です。災害も防ぎようがなく、いつテロのような事件に巻き込まれるかわからない様な時です。また老いや病いの問題も避けようがなく、身に引き受けていかねばならないことです。



良寛さんの有名な言葉に「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候、死ぬ時節には死ぬがよく候」という言葉があります。は、災難や死に直面しても、それから逃げずに、それを直視して受けとめる。それが死を乗り越える「妙法」である、と死に立ち向かう良寛の姿を明らかにしています。

良寛さんは、あくまでも釈尊と同じく、病いと死は避けることができないという事実立って、人生を直視して自覚的に歩めといひます。良寛さんの晩年は、やはり病氣との闘いでした。良寛さんは、症状に応じた民間療法などで養生しています。また下痢に悩まされながらも、その症状を的確に書いています。日々に衰弱していく自分を自覚しながらも、看病する弟子の貞心尼と歌をよみあひます。そして、

★「うらを見せ、おもてを見せて、ちるもみぢ」

とよみました。表裏・生死・美醜・善悪など二元対立するものから、つねに自由になろうとする良寛ならではの句です。老いることは、病むことである。病むことは、また老いることである。そして、老いと病いの向こうには、死が厳然としてある。



★「この夜らの いつか明けなむ この夜らの 明けはなれなば をみな来て はりを洗はむ こいまろび あかしかねけり 長きこの夜を」

※はり=尿

※この夜は何時ごろあけるのだろうか。この夜がすっかり明けたなら、女がやってきて尿を洗ってくれるのだろうか。ころびまわって、夜を明かしかねなかったなあ、この(苦しく)長い夜を。

※★★★追記

良寛には、ほかにも、辞世の歌が残されています。

形見とて 何か残さむ 春は花 山ほととぎす 秋はもみじ葉

良寛に 辞世あるかと 人問わば 南無阿弥陀仏と 言ふと答えよ

草の庵 (いお) に 寝ても覚めても 申すこと 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏